

聖書に親しむ

2025年 聖書週間 (11月16～23日)

テーマ：あなたがたに平和があるように (ヨハネ20・19)

2025.11.16

カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10

TEL03-5632-4445 FAX03-5632-4465

郵便振替 00130-6-36546(宗)カトリック中央協議会一般会計口

巻頭言

小さな炎、大きな希望

カトリック東京教区補佐司教
アンドレア・レンボ

2025年の聖書週間のテーマは「あなたがたに平和があるように」(ヨハネ20・19)です。これは復活した主イエスが弟子たちに告げたことばであり、恐れと戸惑いの中に閉じこもっていた彼らに、ゆるしと新しい歩みの希望を与えました。この「平和」は、単に争いがない状態ではなく、神との関係が回復し、心の奥深くが満たされるいのちの調和です。それは、人生の嵐の中でも揺らぐことのない確かな安らぎです。

わたしは思春期のころ、毎週教会に通うタイプではありませんでした。その当時のわたしの信仰は、まだ芽が出たばかりのようなものでしたが、それでも神のみことばにどうしても惹かれるものがありました。

毎週火曜日の夜、少人数の友人たちと集まり、教会ではなくラジオの前に座っていました。そこで、当時ミラノ大司教であったカルロ・マリア・マルティーニ枢機卿の神のみことばについての黙想を聴いていたのです。あの声はわたしたちの部屋の静かな空間に流れ、その温かさと深さでわたしたちを何か大きなものの一部だと感じさせてくれました。そこには、恐れを取り除き、心を開かせる「平和」の気配がありました。

年に二回、枢機卿は何万人もの若者を大聖堂やミラノのサッカースタジアムに集めました。これは単なるイベントではなく、神のみことばを通して友情を深めたい若者たちの集いでした。歌声と期待に満ちた静寂の中で、わたしたちはシンプルで力強い真理を受け取りました。「あなたのみことばは、わたしの道の光、わたしの歩みを照らすともしび」(詩編119・105)。そのことばは、闇を照らし、不安を



静め、心に「平和」を与える光でした。

現代、戦争や難民、環境破壊、不正義などの暗いニュースが絶えません。そんな中、詩編119・105の「あなたのみことばは、わたしの道の光、わたしの歩みを照らすともしび」ということばは、小さくも確かな光として響きます。それは未来すべてを照らす強い光ではなく、次の一步を踏み出すための炎です。みことばは闇をすぐに消すわけではありませんが、日々、正義とあわれみの道を選ぶ力を与えます。混乱と危機のただ中で「光を運ぶ者」となることは、弱い者を受け入れ、悪に立ち向かい、分断を超えて和解を築くことです。こうしてみことばはわたしたちを導き、他者の道しるべにもなるのです。

今、あの火曜日の夜や大きな集まりを振り返ると、わたしは強く感じます。神のみことばの学びを新たにしよう。それは果たすべき義務ではなく、わたしたちを変える生きた出会いだからです。神のみことばは、永遠で普遍的な神の国、真実と正義の国、聖さと恵みの国、愛と平和の国を前進させる強く具体的な道具です。

「あなたがたに平和があるように」。この平和を受け取り、わたしたちの心と世界に広げていきましょう。

「あなたがたに平和があるように」

神言修道会司祭 赤尾 道夫

ヨハネ福音書の復活顕現物語において、イエスはまず週の初めの日の朝早く、墓でマグダラのマリアと出会います（20・11 - 18）。そして同じ日の夕方、家の中にいた弟子たちに現れて「あなたがたに平和があるように」と語りかけました（20・19）。

「平和」を意味するヘブライ語の「シャローム」は古代イスラエルにおいて挨拶の言葉としても使われました。相手の平和を尋ねたり願ったりするのは「お元気ですか」「あなたがお元気でありますように」というくらいの意味ですが（創世記 29・6、43・27 など）、挨拶以外でも「シャローム」という語は単に「争いがない状態」（サムエル上 7・14 など）という平和だけではなく、「欠けているところがない」「無事」「幸福・繁栄」「理想的な状態」というようなニュアンスで、心的・内的な状態から社会的な状況にまであてはまるような広い範囲で用いられていたようです（サムエル上 29・7、列王記上 2・33 など）。

福音書に記されている「平和があるように」はギリシャ語の表現であるものの、こうしたヘブライ語表現の用法が背景にあると言われます。挨拶としても新約聖書の中に散見されますが（ローマ 1・7、一コリント 1・3 など）、ヨハネ福音書では復活して初めて現れたイエスから弟子たちへの単なる挨拶というわけでもなさそうです。この言葉はこの後もう一度繰り返され（ヨハネ 20・21）、さらに一週間後トマスがいるときにも同じく口にされた（20・26）ことがわざわざ強調されているからです。

イエスの死後、弟子たちは戸に鍵をかけて閉じこもっていました。「ユダヤ人を恐れて」（20・19）いたためです。師であるイエスが捕らえられて十字架刑に処せられ、自分たちにも危険が及ぶのではないかと不安と恐怖の内にありました。あるいはイエスの遺体を盗んだ容疑をかけられるのを恐れたのかも

しれません。いずれにしろ、その恐れに震える弟子たちの真ん中にイエスは立って、ご自分が共にいること自体が彼らに安心感を与えると言うかのように「あなたがたに平和があるように」と語りかけました。ヨハネ福音書の文脈から考えると、この平和は最後の晩餐のときに聖霊の到来とともに弟子たちに約束されていた賜物でした。「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな」（14・27）。

イエスが弟子たちに与えた平和の祝福は、ただ弟子たちが恐れていたユダヤ人の迫害がなくなり、苦勞も危険もなく過ごせるようになるという安住の約束ではありませんでした。むしろ、「あなたがたに平和があるように」と重ねて言われた後、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」（20・21）と語って、彼らを鍵のかかった安全な家の中から「苦難」がある世（16・33）へと派遣されました。「たとえ困難は続いても、わたしがあなたたちの真ん中にいるから、聖霊が与えられているから十分満たされている、父から遣わされたわたしがそうだったようにあなたたちも勇気を持って使命を果たしなさい」という呼びかけです。こうして主の平和を受けることと使命への派遣が一つに結びつけられています。

弟子たちが平和の挨拶に力づけられて家の中から出て行ったように、この伝承を受けた初期のキリスト者たちも勇気を持って迫害のある世に福音をあかししました。そして今、現代に生きるわたしたちもそれぞれの使命に呼ばれています。わたしたちの真ん中に共におられる主イエス・キリストの平和に生かされて、その使命に一步踏み出すことができますように。

主よ、平和をわたしたちにお授けください (イザヤ 26・12)

聖アウグスチノ修道会 カトリック葛西教会主任 柴田 弘之

太平洋戦争終結から 80 年がたつ今も、複数の戦争・紛争が世界各地で継続しており、そんな中であって平和についてあらためて考え、語り合い、祈る機会がありました。戦争体験者、被爆者の方々やその家族の証言に耳を傾け、また眠っていた記録、写真などを掘り起こして展示するイベントも行われていました。二度と同じ過ちを繰り返さないための不戦の誓いとともに、あらゆる人々が真に尊厳を保証された平和な関係を志すことの大切さを学ぶ区切りの年になったと感じています。しかし現状は厳しく、人としての最低限の尊厳さえも奪われた深刻な事態が世界各地で進行しており、悲嘆にくれるこうした人々を見ながら自分たちにいったい何ができるのかと希望を失いかけているわたしたちがいます。そんなわたしたちを「平和があるように」という主のみことばの光はどのように照らしてくれているのでしょうか。

戦争といった深刻な状況に至らないまでも、わたしたちはともに生きていく上で様々な利害の違いから衝突や仲違いを経験します。衝突が起こってしまったときの解決のすべを持っていることは大切ですが、衝突がより深刻な状況になる前に対処することがさらに大切になってきます。まずは自分から出かけて行って祈りのうちに対話を求め、互いに思いを正直に伝え、相手に耳を傾ける。そして自分に非があった点についてはゆるしを求め、相手が心からゆるしを求めたならばそれを受け入れる、こ

うした基本的姿勢が平和を希求する一人ひとりに求められるでしょう。

聖アウグスチノは司教に叙階されてまもなく、自身が始めた信徒の共同体また後には司教とともに暮らす司祭の共同体に向けて「会則」を書いています。短い小冊子ですが、その中で共同体内での不和が生じた際にどう対処すべきかに関して一つの章が割かれています。「仲違いはできる限りすぐにやめなければならない。そうでなければ、怒りは憎しみへと発展し、一つの棘が丸太になり、ついにその魂を殺人犯にってしまう」と指摘し、さらに「あからさまの侮辱や罵り、激しい非難などをもって他人を傷つけた者は、相手に詫^わびることによって、与えた害をできるだけ速やかに償う」「害を受けた方も、それ以上口論せずゆるさなければならない」と迅速に和解への道を模索し歩み始めることを命じるのです。もちろん小さな共同体内での和解の模索と複雑な国際関係における平和構築は同じではありませんが、平和を望む者が取るべき方向性を示していると言えるでしょう。

「あなたがたに平和があるように」——受難と死を通して復活された主イエスのこのことばを、教皇レオ十四世は選出直後の挨拶の冒頭で宣言しました。戦争などで空しくも命を奪われた人たちが死の向こう側からわたしたちに向かって叫ぶ声としても響いてきます。わたしたちにはこれに応える使命があるのです。



良書のすすめと読み方

ご注文は「イーショップ教文館」をご利用ください <https://shop-kyobunkwan.com>

- ①『イエスと出会う——福音書を読む』
アルベール・アリ／シャルル・シンガー
木崎さと子 監修 原田葉子 訳
1997年 オリエンツ宗教研究所／教文館 2,500円＋税

当時のキリスト教徒に向けて書かれた「福音書」を、異なった時代・文化の中で生きている私たちが理解するための手引きとして書かれた本です。イエスの誕生から受難・復活・聖霊降臨に至るまでを40章に分け、そのときどきのイエスの言葉や行いが聖書でどう描かれ、それぞれの出来事がどのような歴史状況の中に位置づけられ、今日を生きる私たちにとってどのような意味を持つのかについて、丁寧に見ていきます。イラスト満載のオールカラーでとても見やすい、中学生・高校生から大人の方までお薦めできる、イエスと出会う道を辿る格好の案内書です。



- ②『あなたはわたしの愛する子——心にひびく聖書の言葉』
片柳弘史
2020年 教文館 1,000円＋税

SNSで多くのフォロワーを持つイエズス会司祭による、ブログから厳選された40篇のバイブル・エッセイを収録した著作です。「聖書と向かい合い、神さまと対話するうちに、わたしたちの人生は聖書の中に溶け込んでゆきます」と著者が語るように、2000年の時の隔たりを越えて、現代の私たちがイエスを師とし、友として歩んでゆけるよう導いてくれます。聖書にときどき登場する理解しにくい箇所についても、生活に密着した身近な話題を使って、短く、分かりやすく説き明かしてくれます。福音のエッセンスが詰まったミニ説教集としてお薦めです。



- ③『〈シリーズ・世界の説教〉近代カトリックの説教』
高柳俊一 編
2012年 教文館 4,300円＋税

対抗宗教改革以後から現代に至るまでのカトリック教会における代表的な説教を収録しています。ロベルト・ベラルミーノ枢機卿やフランソワ・ド・サルなど17世紀の教会博士たち、カール・ラーナー、ハンス・ウルス・フォン・バルタザール、エドワルト・スキレバックスなど20世紀を代表する神学者たち、そしてヨハネス23世、ヨハネス・パウルス2世、ベネディクトゥス16世など現代の教会を導いた教皇たちが登場します。聖書のテキストから彼らはどのようなメッセージを語ったのでしょうか。今の私たちの心にも響く名説教のアンソロジーです。



- ④『新約聖書の時代——アイデンティティを模索するキリスト共同体』
浅野淳博
2023年 教文館 4,200円＋税

イエス、パウロ、最初期のキリスト共同体がどのような時代・社会を生き抜いたのかを解説する新約聖書時代史です。「第Ⅰ部 列強支配下の第二神殿期ユダヤ教」「第Ⅱ部 最初期のキリスト共同体」「第Ⅲ部 二つの戦争とキリスト教の誕生」で構成され、アレクサンドロス大王の時代に始まり、ローマ帝国の属州支配、ヘロデのユダヤ統治、パウロの宣教、ユダヤ戦争の勃発、キリスト教徒のユダヤ教からの離脱までを解説します。各章末では、現代の私たちが歴史から何を学ぶのかを問う新しい試みがなされています。図版が豊富で楽しく読める入門書です。



◆編集後記◆

平和を願う多くの人の思いにもかかわらず、世界には憎しみや争いが絶えません。平和を実現しようとの動きは遅々とし、希望の灯が見えてはきませんが、粘り強い働きが必要です。前教皇フランシスコのことばが思い起こされます。「心の強さがわたしたちに、『重荷を担う』力、耐える力を与えるのです。個人や共同体の問題を担うことで、他者の多様性を受け入れられるようになり、すべてが無駄に思えるときにも善行を続けることができ、倦みや怠惰に陥ったときにも歩み続けることができるのです」(2021年「世界奉獻生活の日」ミサ説教)。

◆献金のお願い◆

この「聖書に親しむ」は無料で配布しておりますが、諸経費を含め聖書に関する活動のためにご寄付いただければ幸いです。その際は、下記へご送金くださいますようお願いいたします。

振込先： 郵便振替 00130-6-36546 (宗)カトリック中央協議会一般会計口